

教材名 「ひさの星」 (学校図書 4年 p.70 「感動・畏敬の念」)
 (東京書籍 5年 p.34 「美しいもの、気高いもの、大いなるもの」)

1. 本教材について

ひさは自己主張をしない無口な子。川に落ちた幼い子を助けるため、ひさは濁流に飛び込む。子どもは助かったがひさは命を落とす。翌日から輝き始めた青白い星を見て村の人々は「ひさの星が出てる」と言い合う。

▼この作品を自由に読書するとき、読み手は必ずしもひさの心が「美しい」という感想をもつわけではない。読者レビューを検索すると、むしろ「悲しい、切ない、辛い、残酷」などが多く、「美しい」と書かれたものはごく少ない。ほかにも様々な感想がある。ところが本学習では、ひさの心を「美しいもの、気高いもの、大いなるもの」とし、「感動・畏敬の念」の対象としている。このように、文学作品を徳目に当てはめ、ある方向に誘導して読ませることは、作品の本来の価値を歪めるものである。

また、自己犠牲を美しく気高いものとして読ませることは、人命と人権を大切にする観点から問題がある。

▼【学校図書・別冊】の問い;「目にはみえないけれど、なんて美しいとかんじたことをしょうかいしあいましょう。」
 ——ここで何を学ばせようとしているのだろうか。

別冊 P.48「保護者の方へ～この教科書でめざすこと」の中にこう書いてある。「連綿として続いている命と、その中で今生きていることを大切に思う心があることを知るとともに、それを超えたところにある美しさ」・・・と。つまり自己犠牲の美しさを意図しているのである。その事例を「しょうかいしあいましょう」と働きかけることは、自己犠牲の精神を内面化させることをねらうものである。

2. 本教材を扱う際に、特に注意すべきだと考えたこと

○【東京書籍】では題名の右に「美しいもの、気高いもの、大いなるもの」と書いている。【学校図書】では「心の美しさ」「ひさの星」と並べて書いている。これを目にすると、自己犠牲の美しさへと読みが方向づけられてしまう。そこで教科書を開かない手立てとして、絵本の「読み聞かせ」が考えられる。徳目に方向づけられることなく、自由な感想を持てるようにしたい。※時間が残ることが考えられるので、「星」に関する短い物語、天体の本などを用意する。

3. 指導過程

	子どもの活動や教師の発問等	留意点
導入	○読んだことのある齊藤隆介の作品を思い出す。 ——「花咲き山」「モチモチの木」など。	※齊藤隆介の絵本は図書室に在る。「モチモチの木」は3年国語(光村と教育出版)に掲載されている。
展開	○「ひさの星」の絵本を読む。(教師の読み聞かせによって。) ○感想を聞き合う。	自己犠牲が美しいという方向付けを回避する。(教科書を開かない。)
まとめ	○自分の感想をまとめる。	※時間が残れば、星に関する本を紹介したり読んだりする。

4. 参考資料 「ひさの星」(創作絵本7)齊藤隆介;著、岩崎ちひろ;絵、岩崎書店